

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第6回：思春期にみられる厄介な行動のメカニズムを知る

人間関係は、一者・二者・三者・四者の4つの関係に分類されます。思春期に入ると、二者関係(母親と親友との関係で、父親はそこには入ってきません。入ってこれないと言っても間違いではない関係なので三者関係と言います。)に分裂が生じます。共生関係にあった母親との関係に距離が空き、親友との関係が密になり、親友としか共有しない秘密の事柄が生まれてきます。

そのことは、自分のために子どもがいて、子どものために自分はあるという思いで関わってきた母親にとっては、実に寂しい現実かもしれませんね。しかし、親友とのコミュニケーションがあってこそ思索を深め、例えばクラスメイトといった周囲の人たちが個性的で異質であることを認め、受け入れようとし始めますので、子どもの成長を願うのであれば、ここはグッとこらえる必要がありますね。

実は、先ほどチラッと述べました三者関係(父親や友達)が決して意味が乏しいという関係ではありません。この関係を通してルールや秩序などといった社会性を身につけるという意味では、社会で生きていくためには必要な関係なんです。ただ、現代のような管理主義的なクラス運営をする(やれクラス対抗やクラス単位で発表をさせるといった)学校にあつては、思春期の子どもが所属するクラス自体は“運命共同体”を形成し、運命共同体でしか通用しないルールや規範でもってクラスメンバーを縛ることで、クラスとして良い結果を得るために一丸となることを求めます。

もちろんクラスのメンバーは個性の塊の集団です。とは言え、一丸となるためにクラスメンバーの誰かがその集団を引っ張るために強い“力”を働かせた場合には運命共同体の他のメンバーは個性を打ち消して右か左かの方向に向かうこととなります。結果、上手く運命共同体が形成されれば、教員としては管理しやすいクラス(まとまりのあるクラス)になりますが、下手に運命共同体が形成されてしまうと実に手を焼くクラスとなってしまいます。

もしクラスの中に運命共同体を形成しようとする流れに乗ろうとしない(つまり、自分という個性を大切に)子どもがいたとすれば、運命共同体にとっては「不安をもたらす、まとまりを乱す厄介な存在」と写りますので、その子どもを弾き飛ばす(いじめる)ことで不安を無くす“力動”が働き始めます。つまり、その子どもをスケープゴート(生贄)にすることでクラスの中での居場所がなくなり、自分たちの運命共同体を守ろうとします。

もちろん、クラスからはじき出された子どもは居場所がなくなるため、学校外に居場所を求めざるを得なくなります。誰でもですが、自分の居場所を失う、無くなったということを感じると大変な不安に襲われますので、できる限り手っ取り早く、(パシリになっても)外の集団に自分の居場所を見いだそうとするか、家から出ずに一人で不安と戦おうとします。

保護者のみならず教員にとっても、学校外に居場所を見つけようとするにしても学校に行かずに家に居続けるという行動が理解できずに“厄介な奴やなあ”と思うかもしれませんが、子どもたち自身も、その不安からどのようにして乗り切ればよいか分からず困っているんです。まずは、

その気持ちを受け止めてあげることで不安の軽減を図ることが大切なんではないでしょうか。